

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語の学習動機づけの「維持」に及ぼす要因の検討
Author(s)	青木, 多寿子; 鈴木, 宏太郎; 梅本, 菜央
Citation	学習開発学研究, 15 : 11 - 18
Issue Date	2023-03-30
DOI	
Self DOI	10.15027/53781
URL	https://doi.org/10.15027/53781
Right	Copyright (c) 2023 広島大学大学院人間社会科学研究科学習開発学領域
Relation	



英語の学習動機づけの「維持」に及ぼす要因の検討

青木多寿子¹・鈴木宏太郎・梅本 菜央²
(2023年2月2日 受理)

Investigating Effective Factors for Maintaining the Motivation of English Learners

Tazuko AOKI, Kotaro SUZUKI and Nao UMEMOTO

Abstract: Continuous learning is essential to master English. Thus, we investigated how the motivation of English learners could be maintained. Four factors were examined; competitiveness with oneself or with one's friends, the desire for validation in connection with various situations, and the admiration for fluent English speakers. Participants were divided into two groups: the first comprised students who planned to use English in the future, and the second, those who had no such plan. A multiple regression analysis was carried out with both groups, with the "maintenance of motivation" score as a dependent variable and the factors being investigated as independent variables. For the first group, "competitiveness with their selves" and "admiration for their English teachers" had a positive effect on the participants' scores, whereas "competitiveness with other people" had a negative effect. For the second group, "admiration for their teachers" and "admiration for non-teachers" had a positive effect. Lastly, we also discussed what is needed to keep learners' motivation from the viewpoint of English teachers.

Key words: English learner, Maintaining the Motivation, job orientated learners, non job oriented learners, admiration

キーワード: 英語学習者, 動機づけの維持, 仕事で使う学習者, 仕事で使わない学習者, あこがれ

問題と目的

英語という教科は、根気強く学習を続けなければ身に付けることのできない教科である。例えば、英単語をいくつか覚えたり英文法の項目を覚えたりするだけではテストの点数は上がりにくい。その覚えた単語や文法事項を用いて多くの英文を読んだり、英語の音声を聞いたり、英語を用いて書いたり話したりするなどの表現を根気強く繰り返し、継続的に学習をしていかなければならない。しかし、ほんの1、2年これらを繰り返して目に見える成果がでるようなものではなく、英語の最終目標である英語を用いて他者とコミュニケーションをとるまでに至るのには、かなりの長期間、根気強く学習をする必要があるといえる。

ところで、人が取る行動の理由を考える際に、行動を一定方向に向けて想起させ、持続させる過程や機能、その全般については動機づけとして心理学で研究されてきた(赤井, 1999)。例えばフロイトや動物を用いた研究では本能を、認知的動機づけ理論では目標や期待が、人間的動機づけ理論ではコンピテンス(有能性)への感情、デシは自己決定感への要求が行

¹ 岡山大学学術研究院教育学域

² 岡山大学大学院教育学研究科修士課程教育科学専攻

動を統制する要因としている。このように、各研究パラダイムによって動機づけは捉え方は異なっており、確定的なものではないとされる(赤井, 1999)。

他方で、学習者の中には根気強く学習を続けられる学生とそうでない学生とがいる。これも英語学習という行動を一定方向に向けて想起させ、持続させる過程や機能と考えるなら、英語学習の動機づけのパターンの研究と言えるだろう。そして英語の学習動機づけや学習意欲について、これまでに様々なことが指摘されてきた。例えば菊地・中山(2006)は、英語の中でもリスニングに着目し、外国映画を教材として用いることで、中学生のリスニングに対する内発的学習意欲がどのように変化するかを検討した。その結果、教材として外国映画を教材に用いた群が、対照群に比べて、自発的に家庭学習に取り組む学習意欲や教材への興味を高めることが示された。また久保(1999)は、大学生の英語学習における動機づけについて検討している。英語の学習動機を、新たなことを知りたい等、学習自体が面白かったり能力を鍛えたりするために学習する「充実・訓練志向」と、英語ができれば他の人より優れているような気持ちになれるなど、プライドや自尊心のためや報酬を得る手段として英語を学習する「自尊・報酬志向」から捉え、これらの英語学習動機と学習に対する認知的評価、学習行動等との関連を検討している。その結果、英語学習に直接興味や関心がある「充実・訓練志向」は、学習方略を多く使用するといった学習行動につながるが、英語学習に直接関わらない志向である「自尊・報酬志向」は、学習方略等の学習行動に関係しないことが示された。

他方で前述の通り、英語は他教科に比して単語や熟語、構文の暗記など、根気強く繰り返し継続的に学習することが求められる教科であり、単に学習動機づけを高めるだけでなく、その学習動機づけを「維持」することが大切な教科である。しかし、学習動機づけを維持するにはどのようなことが必要か、教師はどのような方法を用いればよいのかというのは必ずしも明らかにはされていない。前述の菊地・中山(2006)の「充実・訓練志向」が学習方略を多く使用するとの学習行動につながることも、別の観点から見れば、学習動機づけが「維持」されているといえるかもしれない。前述のように、動機づけには、行動を一定方向に向けて想起させる側面だけでなく、持続させるという側面もある。そこで本研究では、根気強く学習を持続させることを動機づけが「維持」されていると捉え、それにどのような要因が関わっているのかを明らかにすることを目的とする。この研究を通して、英語の学習動機づけを維持するための教師の働きかけを示すことでよりよい英語教育を行っていくための示唆を得たい。

本研究では、大学生の中でも授業で1年間を通して英語の授業が必修科目となっている1年生を調査の対象とした。この時、英語の学習動機づけが維持される要因として、本稿では英語学習の意味、負けず嫌い、賞賛獲得欲求、あこがれという4つを挙げた。次に、上記の4要因を挙げた理由を述べる。

まず、英語学習の意味に関して、学習動機づけをどのように維持していくのかは、学習者が英語を仕事で使うのかそうでないかによって大きく変わってくると考えた。堀野・市川(1997)は、英語学習の学習方略や学業成績につながる学習動機として、充実志向、訓練志向、実用志向が挙げられることを指摘している。このうち、実用志向とは、仕事や生活に活かすために学習内容が重要であると考えているという志向性のことである。Gardner & Lambert (1972)は、第二言語習得について、就職などある目的を達成する手段として学習をする道具的動機づけが存在し、道具的動機を持った学習者も外国語学習に成功することを明らかにしている。加えて浅野(2002)は、将来にわたって学習を継続しようとする意志を「継続意志」とし、そこには「自分を高めたい」「自分の幅を広げたい」との自己向上志向と、「特に学びたいものがある」「興味ある分野を学びたい」との特定課題志向が関係していると指摘している。将来英語を仕事で使うか否かは、向上心や目的をもって学習に取り組むか否かに関わることであることを考えると、英語学習の動機づけの維持にもこれらが関わっていることが考えられる。このようなことから、本研究では「英語を仕事で使う」群と「英語を仕事で使わない」群を設けた。

次に負けず嫌いをとりあげた。負けず嫌いは一般的に負の側面が強調されがちである。他方で人に負けたくないという気持ちのポジティブな面を指摘する研究もある。例えば杉江(1999)は、学習には適度な競争も必要であることを指摘し、石田・杉山(2016)はクラス間の比較、目標、ライバルとなる友人の存在も必要であるとしている。青木・中島(2011)は負けん気を社会的動機づけとして捉え、学ぶ意欲にプラスの影響を与えていることを示している。負けまいとする根気強いトレーニングが必要になる場合も多い。また、負けず嫌いな学生は、他者だけでなく過去の自分にも負けたくないとの思いを持つ可能性がある。このことから、負けん気が学習動機づけの維持に関わっている可能性を検討する。

さらに賞賛獲得欲求についてとりあげた。自己概念には「公的自己意識」と「私的自己意識」があることが知られている。ここで公的自己意識とは、自己の外見や対人的側面に注意を向けやすい傾向のことである。そして小島・太田・菅原(2003)は、公的自己意識の高い人は、周囲から注目を集めたり、人を感心させたりといった肯定的な評価を獲得しようとする「他者から賞賛されたい欲求」、すなわち「賞賛獲得欲求」があるとしている。杉村・于(1991)は、日本の子どもは親や先生に褒められたいということが学習動機づけに影響しているとしている。加えて英語という教科の特性を鑑みると、外部試験などが多くあり、他の教科に比して自分の実力を周囲に示す機会が多く、英語ができることは「すごい」と思われがちである。つまり、英語は他者から賞賛される機会が多い教科だと考えられる。このことから、賞賛獲得欲求が高い学生は、先生や親、友達から賞賛されるために頑張る、学習動機づけが維持されやすいと想定した。

最後に、あこがれを取り上げた。なぜなら英語は、他の教科に比して、学習者があこがれを抱きやすい教科だと考えたからである。例えば、学習者は授業中に先生や他の生徒が ALT と英語で話をしているのを見る機会がある。他にも日常生活の中で英語話者を目にしたり聞いたりする機会が比較的多くある。また、学習者の周囲の家族、友人、先輩等に英語が堪能な人がいる場合、その人たちにあこがれを抱くことがある。英語学習を通して、異文化に憧れを抱く場合もあるだろう。このように周囲にあこがれを抱き、それに近づきたいとの気持ちが芽生え、英語を根気強く学習することにつながり、学習動機づけが維持されると考えた。これに関し、青木・中島(2011)は、あこがれは内発的な意欲・やる気を介して、内発的動機づけを高めることを示している。また、浅野(2002)は、生涯学習に参加し続ける学習動機として、「継続意志」と「積極的関与」を挙げている。そして、この積極的関与には、学習内容に対する学習者本人の関心だけでなく、整った環境、勉強する雰囲気、応援してくれる人の存在といった「環境・雰囲気・人の応援」が効果的であると指摘している。これらのことから、あこがれを抱く他者が身近に存在することは、学習に積極的に取り組む環境や雰囲気をつくることにつながり、意欲を高め、英語学習の動機づけが維持されやすくなるのではないかと考えた。そこで、本研究では、先生や周りの友人、家族へのあこがれと英語の学習動機づけの維持の関連について検討する。

以上より、本研究では、英語を将来仕事で使う群と使わない群に分け、それぞれの群についてあこがれ、負けず嫌い、賞賛獲得欲求の3つの要素が英語の学習動機づけの維持にどのようにかかわってくるのかを検討する。

方法

調査対象・調査時期

岡山県内の大学生 146 名に 2018 年 10 月上旬に実施した。

調査方法

無記名の質問紙を作成し、任意で回答を求めた。講義内で配布し回答してもらった。回答者には、回答は任意であること、アンケートは統計的な分析のみに用いられること等を説明し、「承諾する・承諾しない」のどちらかに○をつけて意志を明確にしてもらった。

質問紙の構成

学習者にとっての英語学習の意味について 「英語を将来仕事で使う(つもり)」「将来英語を仕事で使わない(つもり)」「その他」の3項目の中から回答を求めた。

英語の学習動機づけの維持 松岡(2006)の「苦手科目がなかなか克服できなかつたり、スランプに陥ったりしても、自分の目標や計画を諦めない」「勉強しているとき、自分の立てた目標を実現する状況が大変厳しくても、それを乗り越えようとする」等、粘り強さを測る尺度を英語の学習場面に当てはまるよう改作したものを7項目使用した。「4:あてはまる」「3:どちらかといえばあてはまる」「2:どちらかといえばあてはまらない」「1:あてはまらない」の4件法で回答を求めた。

負けず嫌い 渡辺・土井(2007)の負けず嫌いを測る尺度、森・堀野(1997)の達成動機を測る尺度を大学生の生活場面に当てはめて改作したものを使用した。さらに、テストの場面や英語の学習場面などにおいての過去の自分に負けたくないとい

う気持ちを測るために作成した項目（「前回のテストより点数や順位が下がったら悔しい」「テストをするごとに少しでも過去の自分よりも成長したい」等）を合わせて13項目で構成し、前述と同じ4件法で回答を求めた。

賞賛獲得欲求 「人と話すときはできるだけ自分の存在をアピールしたい」「大勢の人がいる前では自分を目立たせようと張り切るほうだ」等、小島・太田・菅原(2003)の賞賛獲得欲求尺度11項目を採用し、前述と同じ4件法で回答を求めた。

あこがれ 青木・中島(2011)のあこがれを測る項目と、今井・砂田・大木(2010)の「ファン尺度」のうち、あこがれを測定することができそうな項目を、英語の学習に当てはめて改作したものを10項目使用し、前述と同じ4件法で回答を求めた。

結果

結果の処理

英語の学習動機づけの維持 先行研究で因子分析されたものを改作したため因子分析は行わなかった。

負けず嫌い 複数の先行研究から項目を引用したため、因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行うと2因子となった。第1因子を「他者への負けず嫌い」、第2因子を「自己への負けず嫌い」とした。

あこがれ 2つの先行研究から項目を引用したが、因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行うと2因子となった。第1因子を「先生へのあこがれ」、第2因子を「先生以外へのあこがれ」とした。第2因子の1項目の因子負荷量が低かったため削除した結果、項目数が少なくなり信頼性係数が若干低くなった($\alpha=.644$)。しかし、ある程度の妥当性はありと判断し、2因子の尺度として採用した。

負けず嫌い尺度とあこがれ尺度の各項目の因子負荷量と信頼性係数(α 係数)をTable 1に示す。

Table 1 各項目の因子負荷量と信頼性係数, 因子間相関

負けず嫌い	
他者への負けず嫌い($\alpha=.883$)	
テストやスポーツ, 趣味で友達に負けると悔しい	.825
どうしても私は人に勝ちたい	.789
テストやスポーツで負けたくない人がいる	.768
テストやスポーツではほかの人より高い得点をあげたい	.745
他人に勝つために一生懸命勉強に取り組む	.660
テストの点が友達より悪かったら悔しい	.627
勉強やスポーツで頑張るのは他の人に負けたくないためだ	.619
他の人と競争して勝つと嬉しい	.554
自己への負けず嫌い($\alpha=.793$)	
前回のテストより点数や順位が下がったら悔しい	.828
前回のテストの自分の点数よりも悪い点数を取りたくない	.803
テストをするごとに少しでも過去の自分よりも成長したい	.718
過去の自分に負けたくない	.579
テストで悪い点を取らないために勉強に取り組む	.434
	因子間相関
	.429
あこがれ	
先生へのあこがれ($\alpha=.906$)	
英語の先生は自分の目標としたい人物である	.940
英語の先生のような生き方をしたい	.886
英語の先生には共感できる要素が多かった	.842
英語の先生のような人になりたい	.841
英語の先生のことは尊敬している	.593
英語の先生ですごいと思う人やあこがれる人がいる	.523
先生以外へのあこがれ($\alpha=.644$)	
友人で英語のスキルに関してすごいと思う人やあこがれの人がいる	.684
大学で(友人以外の同級生や先輩)英語のスキルに関してすごいと思う人やあこがれの人がいる	.664
英語に関して目標としている人がいる	.403
	因子間相関
	.398

学習動機づけの維持と各要因の関係

参加者の内、欠損値のあるものを削除して、144人が分析の対象となった。各尺度の記述統計をTable 2に示す。

Table 2 記述統計

	仕事で使う群					仕事で使わない群				
	度数	最小値	最大値	平均	SD	度数	最小値	最大値	平均	SD
他者への負けず嫌い	72	11.00	32.00	23.43	4.26	72	8.00	32.00	22.17	5.70
自己への負けず嫌い	72	11.00	20.00	16.60	2.51	72	5.00	20.00	15.06	3.21
賞賛獲得欲求	72	11.00	43.00	27.22	6.08	72	11.00	42.00	25.01	6.93
先生への憧れ	72	6.00	24.00	16.61	5.10	72	6.00	24.00	13.29	4.02
先生以外への憧れ	72	3.00	12.00	9.00	2.18	72	3.00	12.00	7.19	2.31
英語学習動機づけの維持	72	9.00	28.00	21.22	4.03	72	7.00	28.00	17.29	3.80

次に「英語を仕事で使う」群、「英語を仕事で使わない」群別に負けず嫌い、賞賛獲得欲求、あこがれを独立変数、学習動機づけ維持を従属変数として重回帰分析を行った。

英語を仕事で使う群 「自己への負けず嫌い」から最も強い正のパスが示された(Figure 1)。また、「他者への負けず嫌い」からは負のパスが示された。このことから、英語を仕事で使う群の学習者は、常に自己を高めていこうという気持ちが学習動機づけの維持につながり、一方で、他者に負けぬように学習していると学習動機づけの維持には負の影響を与えてしまうといえる。また、「先生へのあこがれ」からも正のパスが示されている。先生へのあこがれが強ければ学習動機づけが維持されやすいということがわかった。また、英語を話せると周囲に認めてもらえるというような賞賛欲求も動機づけの維持には関係が見られないことが示された。

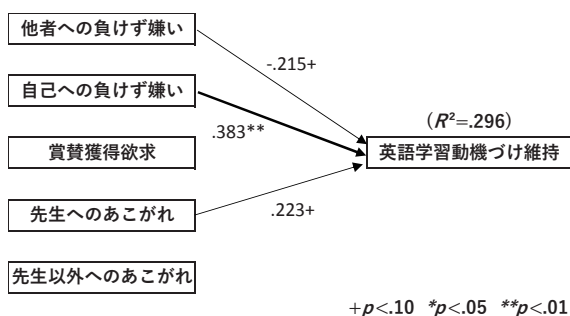


Figure 1 英語を仕事で使う群

英語を仕事で使わない群 まず、「先生へのあこがれ」から最も強い正のパスが示された(Figure 2)。また、「先生以外へのあこがれ」からも正のパスが示されている。このことから、英語を仕事で使わない学習者は、先生やそれ以外の人たちへのあこがれを抱いている学習者ほど、学習動機づけは維持されやすいということがわかった。加えて、他者や自己への負けず嫌い、英語を話せると周囲に認めってもらえるという種の賞賛欲求も、将来英語を使う群同様、動機づけの維持には関係が見られないことがわかった。

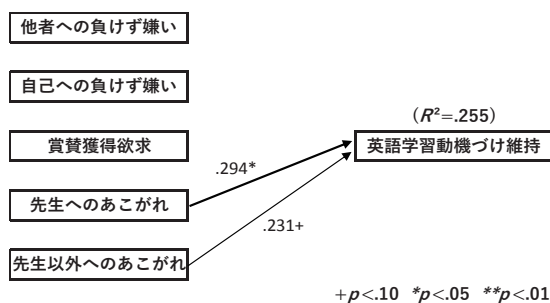


Figure 2 英語を仕事で使わない群

考察

本研究の目的は、根気強く学習を続けられることを学習動機づけ維持と捉え、将来英語を仕事で使う群と英語を仕事で使わない群のそれぞれで、負けず嫌い、賞賛獲得欲求、あこがれの3要因が英語の学習動機づけの維持に及ぼす影響を検討することであった。重回帰分析の結果をもとに、授業中や教育の場面において、英語学習の動機づけを維持していくために教師がとるべき教育方法について考察する。

英語を仕事で使う群

自己への負けず嫌いが動機づけの維持に最も影響を与えている。これは、英語を仕事で使うため、学習者自身が仕事で必要とされている程度までレベルアップをしようとしていると考えられる。一方で、他者に負けぬように学習していると動機づけの維持には負の影響を与えてしまうという。考えてみれば、他者に勝とうとする場合、他者と比較できる場であるテスト以外での学習に意欲がわきにくい。このため、自己の英語力の向上のために学習する動機と比較して、必要な学習量が少なくなる可能性があるのではなかろうか。これに対して、少しでも英語力向上させたいと考える動機付けが高い群は、根気強く学習を継続できる可能性が高いと言えるだろう。

先生へのあこがれについては次の様に考えることができる。先生は最も身近な「英語を仕事で使っている」人である。英語を話せるだけでなく、海外の文化や生活様式等、学生達が知らない世界のことを語ってくれる英語の先生に対して、「英語がわかると、こんな広い世界を知ることができる」との思いを感じるのではなかろうか。このあこがれが英語の学習を続けることを可能にしているのかもしれない。

英語を仕事で使わない群

この群で動機づけの維持に最も影響を与えるのは先生へのあこがれであり、先生以外へのあこがれも影響を与えていた。また、仕事で英語を使う群とは異なり、自己への負けず嫌いが学習動機づけの維持に影響を与えない。これらより、この群の学習者は、自己の英語力の向上はあまり気にせず、「すごい」と思う人が身近にいと、そのようになりたいという気持ちが芽生えて学習動機づけは維持されやすくなると考えられる。

動機づけ維持のための教師の手立て

まず、学習者全体に対して先生へのあこがれはプラスの影響を及ぼすことがわかった。このことから、英語への動機づけを生徒達に維持して学び続けてもらうためには、教師は英語を生徒の前で話すなどして、先生へのあこがれを持たせることが重要であることが示唆された。この結果は、あこがれが内発的意欲ややる気につながることを示した青木・中島(2011)の

結果と類似している。青木・中島(2011)は、小学生と中学生を対象に、あこがれは内発的な意欲・やる気を介して、内発的な動機づけを高めるマスタリー目標に繋がることを示している。この中で、あこがれが高い群は、動機づけが自分を高めようとするマスタリー目標と関係しているのに対して、あこがれが低い群は、それは動機づけにつながらず、負けん気や妬みが動機づけにつながることを示している。そして本稿でも、あこがれは両群において動機づけの維持に関係していた。つまり、英語のように、継続することが力を発揮する教科の場合、教師はまず、児童生徒にあこがれを感じてもらうことが重要であることを再認識する必要があるだろう。

また、英語を将来仕事で使う学習者には、自己への負けず嫌いが1番大きく関与した。これに関して、浅野(2002)は、学習を継続させようとする「継続意志」には、自分を高めたい、自分の幅を広げたいといった自己向上志向が関わっていることを指摘している。本研究で検討した自己への負けず嫌いは、「過去の自分に負けたくない」「テストをするごとに少しでも過去の自分よりも成長したい」との自己向上志向的な側面を含んでおり、英語学習の動機づけの維持にも、この要素は重要であることが示唆された。このことから、教師は、学習者が自分自身の成長がわかるような手立てをとり、過去の自分より成長させようとする必要があることが考えられる。つまり、教師は、学習者が自分自身の英語のレベルの成長が感じられるようなテストや、ALT等との実際の英会話の機会を増やす等、過去の自分より英語が上達しているという実感を持つ授業を工夫すること等、向上心をもって学習に取り組むことができるような手立てを考えていく必要があると考えられる。

一方で、他者への負けず嫌いは負の関係が示されている。このことは、教師は学習者に他者との競争はさせない方がよいことを示唆している。これに関し、前述の青木・中島(2011)においても、負けん気はあこがれ高群では自己を高めるマスタリー目標ではなく、単に課題の達成度を求めるパフォーマンス目標にパスがつながっていることを示している。つまり、他者への負けず嫌いは、根気強く自分の英語力を向上させるような、動機づけの維持にはつながらない可能性があるだろう。他方で、負けず嫌いについて、渡辺・土井(2007)は、負けず嫌いを一つの要素ではなく、「競争心」や「頑張り」といった複数の側面から捉えている。負けん気が単一概念ではなく、複数の要素からなる多面的な概念であるかもしれないことを考えると、負けん気についてはさらなる研究が必要だと考えられる。

賞賛を得ることは学習動機づけの維持と関係していなかった。このことは、本稿で取り上げた賞賛、つまり、「人と話すときはできるだけ自分の存在をアピールしたい」「大勢の人がいる前では自分を目立たせようと張り切るほうだ」等は、英語学習の維持には関わっていないことが示唆された。これに関し、久保(1999)は、英語ができれば他の人より優れているような気持ちになれるといった、プライドや自尊心のため報酬を得る手段として英語を学習する「自尊・報酬志向」のような学習活動とは直接関わらない学習動機は、学習行動につながらないことを指摘している。中山(2005)も、英語学習において、他者からの肯定的な評価を求め否定的な評価を避けようとする意図である「遂行目標」は学習方略につながらないことを指摘している。本稿の結果も、これらの結果と一致すると言えるだろう。

以上の結果から、英語学習にとって重要なのは、あこがれや自己への負けず嫌いといった、自分自身の意欲や向上心であり、他者との比較や競争ではないことがうかがえた。つまり、他者との比較は学習者の動機づけの維持にとって望ましくないことを教師は知っておくことが重要だと言えるだろう。より具体的に述べるなら、英語への学習を継続してもらうには、教師はテストの結果や順位をむやみに学習者に教えたり、成績優秀者に何かの報酬を与えたりして、学習者に他者との競争をさせるのではなく、自己の成長が感じられる工夫をし、かつ、そのことが大切だということを学習者に伝える工夫が必要だということである。

最後に、本研究には課題も残された。尺度の信頼性についてである。あこがれの低位尺度である「先生以外へのあこがれ」の信頼性は、 $\alpha=.644$ であり値が低いという問題点が残された。あこがれを測定するにあたり、今後より高い信頼性が求められるだろう。

引用文献

赤井誠生(1999)。「動機づけ」中島義明、他(編集)「心理学辞典」有斐閣。

- 青木 多寿子・中島 恭兵(2011). 児童・生徒の向上心, 目標志向性に及ぼす“あこがれ”の影響 学習開発学研究, **4**, 67-73.
- 浅野 志津子(2002). 学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程—放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から— 教育心理学研究, **50**, 141-151.
- Gardner,R.C., & Lambert,W.(1972). Attitude and motivation second language learning. Newbury House.
- 堀野 緑・市川 伸一(1997). 高校生の英語学習における学習動機と学習方略 教育心理学研究, **45**, 140-147.
- 石田 靖彦・杉山 正悟(2016). 級友との関係が協同的・個別的学习動機づけに及ぼす影響—親和的な関係と競争的な関係に着目して— 愛知教育大学研究報告. 教育科学編, **65**, 109-116.
- 今井 有里紗・砂田 純子・大木 桃代(2010). ファン心理と心理的健康に関する検討 文教大学生生活科学研究所 生活科学研究, (32), 67-79.
- 菊地 一彦・中山 勘次郎(2006). 外国映画のリスニングが中学生の学習意欲に及ぼす影響 教育心理学研究, **54**, 254-264.
- 小島 弥生・太田 恵子・菅原 健介(2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, **11**, 86-98.
- 久保 信子(1999). 大学生の英語学習における動機づけモデルの検討—学習動機, 認知的評価, 学習行動およびパフォーマンスの関連— 教育心理学研究, **47**, 511-520.
- 松岡 弥玲(2006). 理想自己の生涯発達—変化の意味と調節過程を捉える— 教育心理学研究, **54**, 45-54.
- 森 和代・堀野 緑(1997). 絶望感に対するソーシャルサポートと達成動機の効果 心理学研究, **68**, 197-202.
- 中山 晃(2005). 日本人大学生の英語学習における目標志向性と学習観および学習方略の関係のモデル化とその検討 教育心理学研究, **53**, 320-330.
- 杉江 修治(1999). バズ学習の研究—協同原理に基づく学習指導の理論と実践— 風間書房.
- 杉村 健・于 斌(1991). 中国と日本における小学生の学習動機 奈良教育大学教育研究紀要, **27**, 93-102.
- 渡辺 弘純・土井 直子(2007). 小学校における負けず嫌いの積極的意味を探求する 心理科学, **28**, 96-111.

ⁱ 本稿は, 第一著者の指導で第二著者が執筆し, 2017年度に岡山大学に提出した卒業論文を, 第一著者と第三著者で再分析, 加筆修正を行ったものである。